鉄釉陶器（てつゆうとうき）

原清のわざ

陶芸作家・原清は、石黒宗麿、清水卯一という二人の師から学んだ陶芸全般にわたる該博な知識をもとに、鉄釉の特質を生かした黒釉と褐色釉の二重掛けによって動植物の文様を表わすという、独自の作風を確立した。

この映画は、原清の「鉄釉花鳥文大鉢」の制作過程を追いながら、その鉄釉陶器のわざと、作陶に対する思いを描いたものである。

平成22年度
工芸技術記録映画
35ミリ・カラー・39分
企画　文化庁
製作　桜映画社

鉄釉陶器（てつゆうとうき）

原清のわざ

原清の仕事場

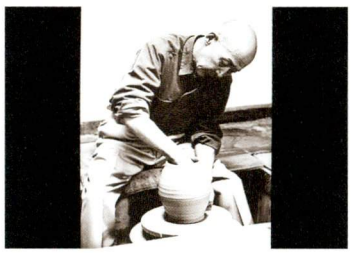
陶芸作家の住まいと工房は、埼玉県の北西部、寄居町にある。

鉄釉陶器とは

鉄釉陶器は、釉薬（うわぐすり）に含まれる鉄分によって黒色・茶色・黒褐色・柿色などを呈色する陶器の制作技法で、古来、中国各地でつくられ、わが国では鎌倉・室町時代に瀬戸で焼かれて以来、発展してきた。

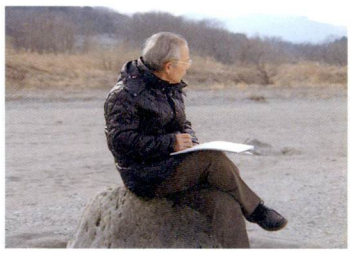
原の鉄釉陶器

原清は、この鉄釉陶器で独自の作風を確立したことによって、平成17年（2005）、国の重要無形文化財「鉄釉陶器」の保持者に認定された。



生い立ちと、2人の師との出会い

少年の頃、陶芸に惹かれて京都で働くようになった原は、偶然、比叡山の麓の八瀬に工房を持つ陶芸作家の石黒宗磨に出会い、内弟子となった。その後、石黒の一番弟子・清水卯一のもとで10年間、本格的な陶芸を学んだ。



作品の構想

「やきものはまず形があって、形だけで十分に美しいものでなければならない。形が一つの実在であれば、文様というものは、それに対して夢でなければならない」と語る原。

陶土の調整

原が使う土は、滋賀県産の篠原土。土物（つちもの）らしい素朴な味を出すために、あえて成形のしにくい、傷の出やすいこの土を選んでいる。

土もみ

土は十分にもんで、土の中の空気をぬく。この作業を原は、「捻（ね）じ揉（も）み」と呼んでいる。

大鉢の成形

原の大鉢をつくる工程を見ていこう。まず、大きな丸板の上に土の塊(かたまり)をのせ、これを手で叩いてのばし、鉢の底の部分をつくる。

鉢の縁の造形

底になる部分が出来上がると、つぎに、太い粘土のヒモで鉢の縁の造形に入っていく。

コテやヘラの使用

コテやヘラなどの道具を活用して、鉢の形をととのえる。

高台をつける

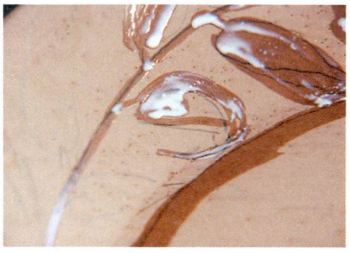
鉢が半乾きになったところで、鉢を逆さにして、細い粘土のヒモで高台をつくっていく。

施釉

まず、一つ目の釉薬「黒釉」を用意する。
釉薬掛けは、素焼きの終わった大きな鉢を手のひらで支えるように持ち、一気に釉薬の中にずぶ掛けにする。

絵付け

釉薬掛けが終わると、すぐ絵付けがはじまる。黒釉の掛かった鉢の表面に、コンテで下絵の位置と文様を素早く絵付けしていく。



生ゴム液を塗る

絵付けが終わると、絵の部分に生ゴム液を塗る。このゴムで塗った部分が、焼き上がると「黒いシルエット」になる。

鉄釉陶器（てつゆうとうき）

原清のわざ

釉薬の二重掛け

二つ目の釉薬「褐色釉」を、刷毛（はけ）を使い、ゴム液を塗った文様の部分全面に塗っていく。

ゴム液をはがす

固まったゴム液をはがすと、そこには、絵筆では表わせない文様が生まれてくる。

陶壁「希望」の制作

原は、平成6年（1994）に完成した寄居町役場の新庁舎エントランスホールに、陶壁「希望」を制作した。

窯詰めと本焼焼成

鉄釉陶器の焼成は酸化焼成で、焼成時間は22時間、焼成温度は1,230度である。

窯出し

窯の火を止めて、数日後。窯の温度が冷めたところで、窯出しをする。

完成作品「鉄釉花鳥文大鉢」

赤褐色の背景の中に、動植物の文様を黒いシルエットで浮かび上がらせた作品。色彩をほぼ2色に抑え、深い鉄釉そのものの深遠なイメージが表現されている。

原清（はら・きよし）　昭和11年（1936）島根県に生まれる。昭和29年、京都において石黒宗麿の内弟子となり、のちに清水卯一に師事し、本格的に陶芸を学び始めた。昭和40年、東京・世田谷に築窯して独立し、鉄釉を中心とする技法・表現上の研究を重ねて技の錬磨につとめ、伝統的な鉄釉陶器の高度な技法を体得した。
以来、陶芸全般にわたる該博な知識をもとに、鉄釉の特性を生かした制作をつづけ、独自の作風を確立した。そのおおらかで洗練された作風は、鉄釉陶器の技法の新たな展開を示すものとして、高い評価を得ている。
平成17年（2005）に、重要無形文化財「鉄釉陶器」の保持者に認定。また、平成4年から（社）日本工芸会理事、平成22年には、同会副理事長に就任し、後進の指導・育成にも尽力している。

協力

東京国立博物館
東京国立近代美術館
世田谷美術館
愛知県陶磁資料館
射水市新湊博物館
埼玉県大里郡寄居町
NHK（映像提供）

製作スタッフ

製作 山本孝行
脚本・演出 村山正実
演出補佐 井上実
撮影 山屋恵司
撮影助手 森英男　大塚崇生
照明 佐藤大和
照明助手 野本敏郎
編集 石井香奈江
録音 荒井富保
効果 帆苅幸雄
録音スタジオ アオイスタジオ
ネガ編集 三陽編集室
選曲 徳永由紀子
タイトル 菁映社
現像 IMAGICA
語り 湯浅真由美